

“人生100年時代”長生きは幸せか

日本の平均寿命年々伸び続けています。昨年の100歳を超える人は、厚労省のデータで47,756人となり、単純予測では、2050年には70万人になるのではないかとわれています。今後、医療技術が更に進めば、まさに“人生100年時代”は、夢ではなくてきました。

本来、長寿は祝福されるべきものだと思いますが、なぜか高齢社会はよくない、困った社会の様に考えたり、長寿自体を望まない風潮が見られます。

2010年10月26日にT保険会社が発表した25歳から65歳832名に“長生き”に関する意識調査した結果によると、「長生きすること」をリスク、チャンスどちらにあてはまるかと聞いたところ、全体で68.3%と約7割が“リスク”と答えています。長生きを“リスク”と捉える人が7割を占める中、長生きへの“不安”を抱える人は、回答者全体の約9割の人が不安を感じると回答しました。

そこで、長生きに不安を感じる“理由”は何か尋ねたところ、“お金(77.7%)、病気・入院(77.4%)”が約8割で上位を占め、次いで“介護(62.6%)”となりました。昨今の“社会情勢や経済状況”という社会的な不安よりも、“介護”という、より具体的に自分および自分の家族に関わってくる事柄を不安視する人たちが多くみられるようです。誰もが亡くなる時には「ピンピンコロリと

逝くのが最高」という願望をもっているようですが、そうは問屋が卸さない現実がある日本では、「寝たきり老人」がまだまだ多く見られます。高福祉国家のスウェーデンでは、「寝たきり老人」というような「寝たきり」という概念すらありません。寝たきり老人というのは、誰も好きで「寝たきり」になっているわけではなく、周りの様々な環境によって、「寝かせきり」の状態になっているのではないかと考え方です。したがって、老人の寝たきり度が、スウェーデンでは日本の10分の1というデータに表れています。“人生50年”といわれた時代から“人生80年”といわれる時代になっていますが、スウェーデンには、「人生100年、最後は1週間」ということばがあります。100歳までしっかり生きて、寝たきりになるのは1週間ということなのです。

スウェーデンには、高齢者福祉医療の三原則というのがあります。第1の原則は「人生の継続性」という原則で、住みなれた環境を維持するという事です。第2の原則は、「自己決定の尊重」です。老後の暮らしは自分で決めるということです。そのためには、24時間対応のヘルパーと訪問ナース、電話1本で駆けつける家庭医、困難な症状には助太刀してくれる総合病院の緩和ケアチーム、家族や恋人が有給でとれる「看取り寄り添い休暇」などが整備されているから可能なのです。3つ目は、「残存能力の活用」です。残っている機能をフルに使ってリハビリするという事です。(以下、4ページに続く)

近世身分制度の真実

1. 「士農工商・えた非人」図式の問題点

ここ数年前で、「部落の歴史」を研修会や啓発パンフレットなどで学ばれた方は、その多くの方々が、江戸時代の社会の仕組みをピラミッド図式(図1)で「士農工商・えた非人」と理解されていると思います。

ところが、研究が進むにつれてそれは間違い

図1●使うべきでないピラミッド図式



だということがわかってきました。[士農工商]という四字熟語は、古代中国の言葉で、身分の別ではなくて、仕事の別を指す言葉だったので。(『漢書食貨志』AD32-92)

ところが江戸時代の儒学者が、近世の身分制度をうまく流布するために、本来「役人」を意味した「士」を、「武士」とし、武士を上にして、その下に農民—職人—商人という順番に並んでいると説明したのです。

しかし、この解釈ですとこの図式から漏れ落ちる階層の人々が出てしまうのです。例えば、漁民・猟師は入りません。木こりと呼ばれた山の民も漏れますし、神官・僧侶も抜け落ちてしまいます。更には、頂点に位置づけられていた天皇・公家も欠落しているのです。このような欠陥をもちながらずっと使ってきたのです。

さて、かつての啓発書ではどのような説明がされていたのかある企業のテキストを紹介すると、次のように書かれていました。

全国を統一した徳川幕府は、その体制をより強固にして、安定的に維持する必要がありました。

そのためには、現状の社会的地位を固定して、民衆の分団支配に都合のよい制度～つまり「士・農・工・商」の上下関係～を設け、お互いを反目させる身分制度を設け、これを世襲化しました。

更に、この「士・農・工・商」の下に「えた・非人」と呼ばれる賤民身分を作って、幕府財政の担い手である農民の不平・不満をそらせ、「上見て暮らすな、下見て暮らせ」とその生活の苦しさを誦めさせるとともに、服従の意識をうえつけました(以下、略す)。

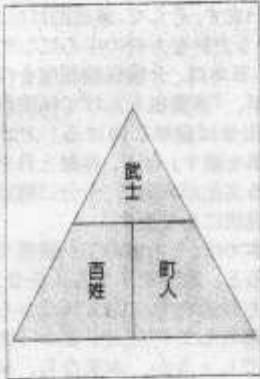


2. 近世身分制度の真実

現在では、ピラミッド図式で説明する啓発書や教科書はほとんど見当たらないようになっています。

では、どのように変わったかといえれば図2のようになっています。すなわち、天皇・公家・武士、その下に百姓・町人がいて、さらに別に「えた」・「非人」がいたとなっています。

図2 ●江戸時代の三身分の関係



ここで皆さん方はお気づきになったと思いますが、なぜ「農工商」でなく、「百姓」「町人」となっているかと申しますと、「百姓」の「百」は、諸々の、多くのという意味です。

つまり、「百姓」とは、多くの「姓(かばね)」の総称なのです。

もともと漢語本来の使い方ですので、今でも韓国・朝鮮人、あるいは中国人・台湾人の皆さんもそのような意味合いで理解されています。日本の場合も、この言葉が到来した頃は、その意味で使われていましたので、「百姓」の中に漁民・山民も含まれていたのです。しかし、権力者が身分社会制度を維持するために人々を把握する必要から村に居住する人々を「百姓」に、町方に居住する人々を「町人」としたのです。そのために、何々村という村に居住した人々は、すべて「百姓」に位置づけ

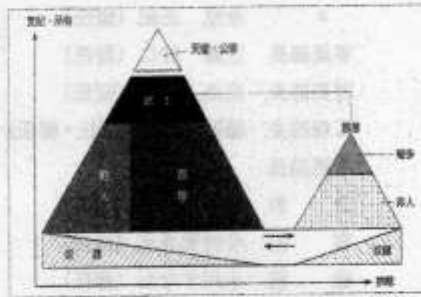
られたものですから、漁村であっても山村であっても、それらの村の住民はすべて「百姓」とされたのです。

たとえば、農村の中にも1軒や2軒は大工さんとか、左官屋さんがおられたと思いますが、現在では、職人に位置付けられると思いますが、農村に居住する場合、当時は身分的には百姓だったのです。また、町に居住していた工・商の人々は、すべて町人身分となっていたのです。

3. えた・非人身分はどうだったか

百姓・町人とは別に、えた身分、非人身分はいましたが、当時の身分は、先に述べたように、基本的には住まいを定めた場所で決まる制度だったため、侍(武士)の社会、百姓・町人の社会、「えた」「非人」身分など被差別民の社会がそれぞれ独立して共存していたのです。したがって、いわゆる「部落」は「下」や「最底辺」ではないということです。又「外(ほか)」という使い方をした文書も存在します。

図3 ●新しい身分図式(部落内部のあり方は関東の場合)



上杉聰「これでなっとく!部落の歴史」解放出版社 P43

お知らせ

2012年度人・同協の体制

2012年度の総会が5月28日に開催され、委員及び役員ならびに会計監査が承認されました。

また、会の規約の改正についても、承認されました。

改正に基く役員体制については、今年度かけて体制づくりを行い、来年度の総会で承認を受けて正式にスタートすることにしますが、役員体制の改正点は、事務局体制を強化するため「庶務」を1名減らし、「事務局長」を置き、「庶務」を「総務」に改めたほか、職掌を明確に規定しました。

昨年度に発足20周年を迎え、今年度から成人にふさわしい組織として、差別をしない・させない・許さない「人権のまち海蔵」をめざして、一同力を合わせて頑張りますので、地域の皆様のご支援ご協力をお願いします。

2012年度 役員体制

会長	川森 一成 (留任)
副会長	藤岡 満 (留任)
"	金原 正紀 (留任)
事業部長	近藤 好仁 (留任)
啓発部長	児島 均 (留任)
広報部長	藤岡 満 (兼任・留任)
事務局長	(未定)
会計	高阪 律子 (留任)
書記	今村まきえ (留任)
総務	小川すなお (留任)
同 会計監査	位田 昭夫 (留任)
"	堀部美代子 (留任)

(1ページより)

日常生活において、自分でできる事は何でも自分でやってもらうという原則です。本人ができることも全部手助けしてしまうのは、残存能力を低下させるから、やってはいけないという考え方が徹底しているのです。

スウェーデンという国は、一人ひとり尊重していて、それが細部にまで行き渡っています。寝たきりにさせない、なるべく離床させて、むしろ身体機能を回復させていくという、リハビリにすごく気を使っています。そして、最終的には、在宅で、という方針を方針の中心にしているのです。日本は、介護保険制度を作っていますが、「消費税をあげて保険料負担を持ち出せば選挙に負ける」とか「日本の美風を壊す」など、尊厳と自立を大切にしない文化が未熟で、十分に機能していない現状にあります。

一昔前の日本では、その家の主が還暦や古希を迎えると、家業を子どもに任せ、余生は子どもや孫たちに囲まれながら悠々自適に暮らしていた人が多かったのではないのでしょうか。本来なら、60歳、70歳まで一生懸命働き、家族を養いながら社会にも貢献してきたのですから、老後こそ、その成果を享受できる時間にならなくてははいけないと思いますが、残念ながら、経済優先で命や人権を軽視する世の中になっているのではないのでしょうか。高齢者は、世の中に役立たない存在だと言う考え方が強くなって、風当たりが強くなり、見捨てられるために、孤立死や孤独死など痛ましいニュースが後を絶たない現状があります。せっかくこの世に命を授かり、一生懸命人生を歩んできた一人の人間の尊厳が、老後にないがしろにされてしまうような現状から、一日も早く脱出するてはいけないのではないのでしょうか。